

教室での道具として 完結する本

●『小学生の国語』『小学生の書写』アートディレクター 新谷雅弘



わたしは店頭で売れゆきを競い合う本を長い間デザインしてきた。教科書のデザインは初めてでした。でも本のカタチをしたものなら、これまでの仕事の経験にひとつ加えるだけのことだろうと漠然と考えて、制作ミーティングに出席し始めたのです。

しかし、いつもならわたしの中で立ち上がってくるはずの本の姿が今回はなかなか見えてきません。これはどうしたのだろうとあせりにも似た気分になっていました。そんなある日のミーティングで、各地での研究会での報告を聞いていて、はっと気づいたことがあります。それは「教科書は道具でもある」という点です。

これまでにながたし作り手として接してきた本は、何十萬部が発行されていようと読むのはひとりだけでした。作り手はそのひとりに対してメッセージが届くように、楽しんでいただけるように苦心します。そうしてきたために、

教科書が教室という現場で、その場のみなが学ぶ手がかりにするための道具であるというあたりまえのことに気づくのに時間がかかりました。

教科書には、道具であるとしてもデザインの間では見飽きない魅力的な美しさやおもしろさが欲しいし、ばらつきのある一人一人の理解度に沿った機能性も備えさせたいと考えると、これまでに作ったことのない本で、これまでに作る難しさが見えてきたように思われました。



しんたに まさひろ 1943年、大阪市生まれ。1970年、『アンアン』の創刊に参加して編集デザインの仕事を始める。以降、雑誌だけでなく多数の本のデザインを担当し続けている。